

ワークショップ

教育に関わる人のための「教える・学ぶ・ケアする」 ワークショップ

牧裕夫

・ Gehrtz 三隅友子

(徳島文理大学人間生活学部心理学科)・(徳島大学国際センター)

1. 「教える・学ぶ」

教師は様々な教育現場において教育活動を行っている。それらの活動に関わる人たちの関係性が単に「教える・学ぶ」といった対立的なものとして捉えられるだけでなく、教師・学生・行政(学校組織)の三者が各自の立場で「学ぶ」そして「学び合う」ものであることも十分認識している。

また教師が「教える」ことを振り返る(内省する)のは、活動において意図したこととのずれ、すなわち、ねらいが達成できない、教育方法に対して疑問をいだくといったことや、学生との関係に問題を感じる時と言われている。内省する存在である一方、教師が何よりも「学ぶ」側の変化に注目し、いかに効率よく意欲を持って「学ばせる」かを要求されていることも事実である。

2. そして、「ケアする」

上述の関係性と同時に今まさに、「ケアする」の必要性が言われている。教師側からの一方的な働きかけだけではなく、学生の側の反応からも教師は「ケアされる」必要があるという。すなわち、互いが「ケアする・ケアされる」ものとしての相互依存の関係の必要性である。

「ケアする」とは、教育活動に関わる人たちが、同じ目標を目指していることや、またそこでの一人ひとりが互いの存在を認められ、大切にされているという感覚とも言える。これが教育の根底にある場合とない場合を考え、その教育効果のありかたを想定することもできるだろう。

3. 「サイコドラマ」という方法

次ページの資料(増野肇著『新版心理学辞典』より一部引用)を参照されたい。「サイコドラマ」においては、参加者全員で「劇」を作り上げるプロセスが「対話」であり、そこから得られる感覚

がまさに「ケアする・ケアされる」である。

教師(組織において教育に関わるもの)が、自ら「教える・学ぶ」そして「ケアする」環境を教育活動において作ること、そのためには、自らが「ケア」という感覚を十分に体感することが何よりも必要という点を重視したい。すなわちドラマで得られた体験が、これからの教育実践さらに日頃の人間関係やコミュニケーションの在り方にも大きな影響を及ぼすと考える。

4. ワークショップの目指すもの

①先生と学生を見直す(担当者牧から)

『サイコドラマの創始者 Moreno は哲学者 M. Buber と交流があり、Buber は「我-汝関係」「我-それ関係」の二者関係について、先生と学生もお互い「単位を出さず、出さない」等の道具的な関係でなく、無限の可能性に開かれた関係を持つものと述べています。これこそが体験できればよいと考えます。Buber は「我-汝関係」には Cosmos としての創造性があるとし、この点で集団関係での Cosmos に着目した Moreno との共通したところでは、学生との間でどこに Cosmos を見いだしていくのか、そして多様な先生方の資源が必要とされているように思えます。』

②体験から学び共有する

「先生と学生との関係」を見直す「ソシオドラマ」(サイコドラマの中で社会的テーマを扱う)を通して、参加者一人ひとりの「教育観」を目に見えるものとして引き出し、そしてそれらを互いに尊重し大切にすることを本ワークショップの目的とする。

参考文献: Nel Noddings『Caring(ケアリング)』

立山他訳 晃洋書房 1997年

＜昨年参加された方も初めての方もどうぞご参加ください、教師だけでなく教育に関わる人、学生等全てが対象です。＞

ワークショップ資料

「サイコドラマ : Psychodrama」

増野 肇 『新版心理学事典』平凡社 より一部引用

心理劇とは、即興劇の形式を用いて、人間および人間をとりまく状況を探求する科学である。主として集団心理療法の一技法として用いられるが、教育や訓練のためにも広く用いられている。心理劇は、モレノ Moreno, J.L. によって創始された。彼はルーマニア生まれのユダヤ人の精神科医であるが、演劇に興味をもち即興劇団を組織して公演をしているときに、ある女優の家庭問題を劇のなかで解決したことをヒントに心理劇を考案した。後にアメリカに移住し、ニューヨークのビーコンに心理劇の劇場をたて、世界に心理劇を広げた。わが国には松村康平が紹介し、教育の面で用いられていたが、ここ数年、精神病院などでも多く利用されるようになってきている。

【心理劇の理論】

心理劇の目的の第1はカタルシスである。主役は、舞台という仮の世界のなかで自己のテーマ、あるいはドラマを十分に表現することによって、行動を通してカタルシスを得ることができる。第2の目的は、ドラマチックな状況のなかで自発性をひき出すことである。自発性とは、突然予想もされないときに現れる創造的な力であり、環境に適応し、聞きを克服する働きをもっている。それは情念でもあり、マンネリズムの逆である。日常の生活のなかで埋没している自発性をひき出し、新しい自分の生き方を発見させるのが心理劇の役割である。自発性を発揮した生き方をすることで、役割取得 **role taking** の段階から**役割演技 role playing** の段階に到達できる。つまり、単なる役割としての形式的存在から、その人でなければならない、その人だけのもつ生き方ができるようになるのである。また、心理劇が成功したときに生まれる演者の間の真のコミュニケーション、「出会い」を **テレ télé** と呼ぶ。一方、治療者は、主役がくり広げるドラマの世界やそのなかでの彼のふるまいを通して、より深く彼を理解することが可能になる。それは、主役をとりまく他のメンバー、相手役や観客にも生じるのであって、そこから生じる集団の受容的な力は大きい。このようなメカニズムを助けるものとして舞台は、安全で、自由な空間を提供する。舞台としては、ビーコンにモレノが作った、3段階の半円型の舞台と、神の座としてのバルコニーが有名である。監督となる治療者は、主役と話し合いながら、主役にとって必要かつ適切な状況を舞台の上に設定する。その状況のなかで、十分に自己表現ができ、自発性を出せるように援助するのが**補助自我 auxiliary ego** である。補助自我とは、主役の自我を補うという意味である。重要な相手役は補助自我であり、治療者が演じることもあれば、他のメンバーが演じることもある。補助自我は、主役が危機を克服するように支えたり、自発性をひき出すように自分の自発性を出して刺激したりする。監督の用いる技術としてはいろいろあるが、相手役と役割を交換することによって、相手の立場から自分を客観的に眺めることを助ける**役割交換 role reversal** や、補助自我が主役の分身となって援助する**二重自我 double self** (ダブル) などが有名である。セッションの最初から深いドラマに入ることはむずかしいので、体操やダンスで身体を動かしたり、おしゃべりや簡単な役割を演じることで準備体操を行なうが、これをウォーミングアップという。このウォーミングアップの間、監督は、各メンバーのテーマや自発性をはかり、セッションの主役をきめる材料とする。セッションは1時間から2時間で終わり、最後には観客を含めて全員で話し合う時間をもつ。観客はギリシア劇のコロスと同じく、世論としての役割をもつ。